

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 甲第 1820 号

Clinicopathological features of alpha-fetoprotein producing early gastric cancer with enteroblastic differentiation

(AFP 産生胎児消化管上皮類似早期胃癌の臨床病理学的特徴)

松本 紘平 (まつもと こうへい)

博士 (医学)

論文内容の要旨

胎児消化管上皮類似胃癌は AFP 産生胃癌の非常に稀な一組織亜型である。近年、内視鏡治療の進歩と普及に伴い、早期胃癌に対する内視鏡治療の適応範囲が急速に拡大されてきている。その為、内視鏡医にとって種々の組織型の早期胃癌の臨床病理学的特徴を把握することは必須であるが、胎児消化管上皮類似早期胃癌に関する報告はみられていない。本検討では、胎児消化管上皮類似早期胃癌と通常型早期胃癌（高～中分化型腺癌）を比較することで、その臨床病理学的特徴を明らかにすることを目的とした。

2011 年 9 月～2015 年 2 月に、当院で内視鏡的粘膜下層剥離術もしくは内視鏡的粘膜切除術を施行された胎児消化管上皮類似早期胃癌と通常型早期胃癌について遡及的に検討した。胎児消化管上皮類似胃癌は、明調な胞体を持つ立方状もしくは円柱状の細胞から成り、胎生初期の消化管に類似した構造を呈する腫瘍で、AFP、Glypican3、SALL4 のいずれかの免疫染色が陽性のものと定義した。年齢、性別、発生部位、腫瘍径、肉眼型、潰瘍形成の有無、深達度、リンパ管および静脈浸潤率、水平および垂直断端陽性率、治癒切除率について比較検討した。

胎児消化管上皮類似早期胃癌は 6 例（男性 5 例、女性 1 例、平均年齢 75.7 歳、計 6 病変）、通常型早期胃癌は 186 例（男性 139 例、女性 47 例、平均年齢 72.7 歳、計 209 病変）であった。平均腫瘍径は同等であったが、粘膜下層浸潤率、リンパ管浸潤率、静脈浸潤率、非治癒切除率は胎児消化管上皮類似胃癌で有意に高かった(胎児消化管上皮類似型胃癌 vs. 通常型胃癌 = 66.6% vs. 11.4%, 33.3% vs. 2.3%, 66.6% vs. 0.4%, 83.3% vs. 11%, $P<0.01$)。内視鏡的に粘膜下層深部浸潤は予測困難であり、術前生検で胎児消化管上皮類似胃癌と診断できた症例は一例も無かった。組織学的には、粘膜表層は通常型胃癌に被覆され、胎児消化管上皮類似胃癌はリンパ管・静脈浸潤を伴い粘膜深部～粘膜下層に存在し間質反応は乏しい傾向がみられた。免疫組織学的には Glypican3 が最も感度の高いマーカーであった（陽性率 83.3%）。これらより、胎児消化管上皮類似胃癌は早期であっても高い悪性度を有し、また深達度を含む術前診断は困難であると考えられた。内視鏡医及び病理医はその臨床病理学的特徴を明確に認識する必要があると考えられた。